

Hisho

Love Devotion Harmony Innovation
2017.Winter
VOL.28

飛翔



渡邊 義紘(折葉) Photo©Kenya Doi



あさかホスピタルグループのクレド



基本理念: Fundamental Philosophy

愛情 Love 温かい思いやりを持って、態度・言葉に配慮して、忍耐強く相手の心に耳を傾けること、人の心の痛みを理解できる人間になるよう努力していく。
和 Harmony 職員同士のチームワーク、楽しい職場づくりを考えよう。職務を通して人間性を高め、協調性を保ち、患者さんに良い医療を奉仕する。

奉仕 Devotion 家庭、社会、職場の生活、全てに奉仕の心を忘れないこと、相手によって自分が活かされていることを感謝し、相手から感謝されることを期待してはならない。
進歩 Innovation 常に創意工夫を心掛け、仕事を通じて自己の人間性の進歩を実現する。自ら勇気と向上心をもって、積極的により良い職務を求めていく。



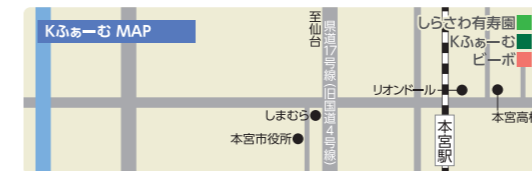
Hospital Principle

あさかホスピタルは基本理念のもと、心と脳の専門機関としてすべての人の心と人格を尊び、質の高い心のこもった医療・保健・福祉を提供します。



あさかホスピタルへのアクセス方法

バス:福島交通/郡山~須賀川線(約20分)西笹川バス停留所
コムニタあさか前下車(徒歩5分)
JR:東北本線・水郡線/安積永盛駅下車(徒歩25分)



2017年2月発行 Vol.28
発行/医療法人安積保養園附属 あさかホスピタル 編集/事業企画グループ
〒963-0198 福島県郡山市安積町笹川字経垣45 TEL.024-945-1701

医療法人安積保養園

- あさかホスピタル**
〒963-0198 郡山市安積町笹川字経垣45
TEL.024-945-1701(代) FAX.024-945-1735
http://www.asaka.or.jp/hospital/ E-mail info@asaka.or.jp
- 介護老人保健施設 啓寿園**
〒963-0102 郡山市安積町笹川字経垣31
TEL.024-946-6145(代) FAX.024-937-3156
- さくまメンタルクリニック**
〒963-8004 郡山市中町7-16 安積野ビル3F
TEL.024-932-5007 FAX.024-932-5913
- コムニタあさか**
○ウエル居宅介護支援事業所 ○ウエル訪問看護ステーション
○ウエルデイケア(重度認知症)
〒963-0102 郡山市安積町笹川字目光池西6-1
TEL.024-946-0581・0582・0583・0584 FAX.024-946-0591

社会福祉法人 安積福祉会

- 特別養護老人ホーム カーサ・ミッレ**
〒963-0102 郡山市安積町笹川字西宿77
TEL.024-946-2818 FAX.024-946-8170
- 特別養護老人ホーム しらさわ有寿園**
〒969-1205 本宮市和田字戸ノ内158番地3
TEL.0243-64-2121 FAX.0243-64-2788
- 介護付有料老人ホーム カーサ・ヴェッキオ**
〒963-0102 郡山市安積町笹川字関谷田3-6
TEL.024-937-2227 FAX.024-937-2228

社会福祉法人 安積愛育園

- 総合児童発達支援センター アルバ**
○入所支援事業所 アルバ ○通所支援事業所 チエロ
○相談支援事業所 エッコ
〒963-0102 郡山市安積町笹川字経垣52
TEL.024-945-0369(代) FAX.024-945-0379
チエロ TEL.024-953-4436 エッコ TEL.024-937-2195

- 障がい者支援施設 あさかあすなる荘**
〒963-0103 郡山市安積町大森町70-1
TEL.024-947-7575 FAX.024-947-7576

- 地域生活サポートセンター パッソ**
〒963-0102 郡山市安積町笹川字四角地54-3
パッソ TEL.024-937-0201 FAX.024-947-5115

- 地域生活サポートセンター パッソ あゆみの家**
〒963-8041 郡山市富田町字池向71-1 ベルエア横山1F
TEL/FAX.024-952-0960

- 多機能支援センター ビーボ**
〒969-1205 本宮市和田字戸ノ内321
TEL.0243-64-2151 FAX.0243-64-2152

- 放課後等デイサービス 安積愛育園 パローネ**
〒963-8835 郡山市小原田3-11-11
TEL.024-944-5536 FAX.024-973-8250

- はじまりの美術館**
〒969-3122 耶麻郡猪苗代町字新町4873 TEL/FAX.0242-62-3454

NPO法人 アイ・キャン

- Ariete「アリエテ」**
○指定相談支援事業所 コンサル ○地域活動支援センター アイ・キャン
○多機能型支援事業所 コラジジョ ○共同生活援助事業 ビータ
〒963-0107 郡山市安積4-3-1 TEL.024-945-1100 FAX.024-945-1129
○イタリア菓子工房 ドルチェ フォーノ
〒963-0107 郡山市安積4-3-1 TEL.024-983-5831
- 就労継続支援B型事業所 みはる工房**
〒963-7712 田村郡三春町大字案内字孝戸71-1
TEL.0247-62-2801/FAX.0247-73-8565

介護保険委託事業

- 安積地域包括支援センター**
安積介護予防支援事業所
TEL.024-946-9088 FAX.024-946-9089
- 本宮市白沢地域包括支援センター**
TEL.0243-24-5131 FAX.0243-24-5254

提携機関

- 有限会社アサカサービスセンター**
〒963-0102 郡山市安積町笹川字経垣45 TEL/FAX.024-945-2713
- イルチェントロあさかビル**
○あさかストレスケアセンター
EAP相談室Lavoro カウンセリングルームComfort
〒963-8024 郡山市朝日3-5-16-2F TEL.024-927-5081 FAX.024-927-5082
http://www.asaka.cc/ E-mail.info@asaka.cc
TEL.024-927-5210 [Comfort 予約専用電話]
○パン工房 フォーノフォーノ本店 TEL/FAX.024-927-5686
○パールイルチェントロ TEL.024-927-5685
〒963-8024 郡山市朝日 3-5-16-1F
- Kふあーむ**
〒969-1205 本宮市和田字戸ノ内158-1 TEL/FAX.0243-44-1411
○リストラテッドレンヂピアンコ
〒969-1205 本宮市和田字戸ノ内158-8 TEL.0243-44-1020 FAX.0243-24-8559

目指すべき社会の在りよう……

あさかホスピタル理事長・院長 佐久間 啓

2016年はイギリスのEUからの離脱やアメリカ大統領選でのトランプ氏の勝利など、劇的な変化が起こった1年でした。格差社会や難民問題がナシヨナリズムと絡み合い、国を二分する事態を引き起こしています。その根本の一つは格差社会への不満にあるのだと思います。日本からは遠い世界の話のように感じる人も多いかと思いますが、日本の社会の根幹を脅かす変化が実際にはじわじわと広がっているように感じます。

日本の格差社会は深刻で、貧困児童が16%とも言われています。子どものネグレクトや虐待、いじめや子どもの自殺、或いは家庭内DVの問題も無関係とも言えません。また家庭、学校、或いは社会でもうまく馴染めずに生きづらさを感じ、発達障害と診断される子どもも増えています。しかし、それ以上に問題なのは多くの「普通の」子ども達が生きることを苦しいと感じたり、ふとリストカットしてしまったり、自殺のサイトを覗いたりしている現実でしょう。

全ての子ども達がいじめや差別を受けずに、安全に健やかに育ち、個性や特性を伸ばすことのできる社会、個性やバランスの異なる人々が分け隔てなく生きることのできる社会、できるだけ多くの人が幸せを感じる社会になることに反対する人はいないでしょう。しかしながら、むしろ今の社会は望むべき姿からどんどん遠ざかっていくように思えてなりません。

昨年のポジティブサイコロジイ学会でのカナダの心理学者エリザベス・ダンさんの特別講演は大変興味深いものでした。2歳の女の子が自分の大好きなお菓子を貰った時よりも、そのお菓子をぬいぐるみのお猿さんにかけてお猿さんが喜んだ時の方が明らかに嬉しそうに笑う映像が流されました。「人間は生まれながらにして、自分の喜びよりも、相手が喜ぶ姿を見てよりハッピーになれる能力がある。人間は元々一人では弱く、助け合わないと生存が難しかったので、生存本能からこのような特性が備わってきたのではないか」というお話でした。

人間の本来の幸せは何処にあるのか、それさえも難しい社会になっています。現代社会は本来幸せになれるはずの子ども達から、何かを奪い取っているのかもしれない。改めて、人の幸せや幸せな社会について考えなければならぬ時代だと感じます。

あさかホスピタルにおける児童精神科医療の展開 — 昨今の現状および地域とのつながり —

児童専門医 こどもの心診療部長 本間 博彰

児童精神科医療は、欧米ではごく当たり前に整備されています。例えば、Children Firstをスローガンにして子ども対策力を入れる人口500万人のフィンランドには5つの大病院がありますがいずれの大病院にも児童精神科講座が設けられ、多くの児童精神科医が養成されています。どの国においても児童精神科医療は守備範囲が広く、乳幼児期から思春期の年齢までカバーしています。病院だけではなく、児童福祉や保健福祉領域にも児童精神科医療従事者が配属され、乳幼児の心の問題のみならず親になって苦労している方々の診療にも積極的に関わっています。我が国においても、子育て不安を訴える親は、子どもの発達を心配して不安になる場合に限らず出産育児を契機に自分のメンタルヘルスを崩している場合もあることが知られ、近年は、医療のみならず母子保健や児童福祉領域と連携して子どものメンタルヘルスに取り組むつつあります。

ここ、県中地区においても、児童精神科医療に対するニーズは高く、当院を受診する15歳以下の子どもの新規受診者は月平均で40名を数えています。受診者数の多い年齢は、6歳、3歳、5歳、13歳の順であり、いずれの年齢も、子どもにとつては重要な時期で、これらの年



年齢の子どもの受診者が多い理由は、この時期が子どもの発達や支援に重要な意味を持つ時期だからなのです。小学校入学の準備の時期、自我が大きく発達する時期、思春期の真つただ中の時期で、子どもやその親に対する専門的な支援が望まれる時期となるようです。問題の中心を見ると、一番多い問題は発達障害のある子どもですが、愛着関係がうまく育たなかった子どもや、学校生活にうまく適応できなかった子ども、心に外傷をもたらすような出来事に遭遇してPTSDの状態になった子どもなど、様々な問題を持つ子どもが受診されます。こうした子どもたちに適切な医療を提供するためには、学校保健や児童福祉、市町村の母子保健、さらには特別支援教育との適切な連携協働作業が不可欠となります。

少し古いデータになりますが、平成26年度における中学生の自殺は99件、高校生の自殺は213件との報告があり(厚生労働省)、全体の自殺者数はようやく3万人を割り始めたものの、20歳未満の占める割合は全体の5%程度で明らか減少はなく、中高生の自殺が報道されることも後を絶ちません。福島県においては震災後の心身両側面への影響を考慮のみではなく、自主避難者のいじめの報道等、福島県における特殊な事情に關しても十分に配慮しながら慎重かつ丁寧に対応していかなくてはなりません。実際、震災からもうすぐ6年になりますが、成人のデータではあるものの、昨年時点で東北6県のうち福島県のみが震災関連の自殺者数が増加していることもその裏付けとなるかと思えます。



精神科医師 武士 清昭

さて、当院の児童・思春期精神科医療の実際ですが、2015年度に当院を受診された20歳未満の方は538人でした。そのうち新規にあたる方は194人でしたが、受診までの待機期間が長くなってしまっており、より迅速にご案内できるように受診経路を整備しています。自殺の危険性を抱えている方も少なくはないため、適切なタイミングでサードピアを提供できるよう努力して参ります。また、様々な要因から入院環境を必要とする方もいるため、児童・思春期の方々にも快適に入院生活を送って頂けるよう、環境を整備していきたいと考えています。

以上の事情を踏まえつつ、未来ある児童・思春期の年代にあたる若者たちへの精神保健サービスの提供を考えるにあたっては、学校を中心とする教育場面との連携は必須であると考えます。この1年間で郡山市、須賀川市の公立高校3校に訪問させて頂きましたが、とても十分な数とは言えません。また、学校場面での精神保健を主に担う養護教諭やスクールカウンセラーとの連携も不十分であるため、今後は積極的な関与を図っていきたく思います。

児童・思春期の時期にある方々が安心して地域生活を営めるよう、当院も協力できたらと考えております。



2016.10.15

一般社団法人 福島県精神保健福祉協会

主管: 県中支部 事務局 あさかホスピタル

第16回 心うつくしまふくしまフォーラム

テーマ: 「若者と自殺について考える」

「自分を傷つけずにはられない! ~若者の自殺予防のためにできること~」

基調講演

国立研究開発法人 国立精神・神経医療研究センター
精神保健研究所薬物依存研究部 部長

松本 俊彦 先生

松本先生は国立研究開発法人 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所薬物依存研究部で、薬物依存、自傷や自殺について臨床研究を重ねる精神科の医師です。



Respond medically, not emotionally



松本 俊彦先生

松本先生は自傷する子ども達をどのように理解し、支援していくかのヒントをお話下さいました。

現状として、10代の1割に自傷の経験者があり、そのうちの6割は10回以上自傷を繰り返す常習性を抱えています。自傷する子ども達は自傷行為を一人ぼっちで行い、そして、自傷のことを大人には話しません。子ども達が自傷を秘める理由は、かつて勇気を出して相談したが呵責に遭った経験がある、あるいは信頼できそうな大人がいてもその人は多忙であることなどが挙げられます。そうして悩みを抱え込んだ子ども達が辿り着く自傷行為には、つらい気持ちを軽減させるという目的があります。自傷行為は「孤独な鎮痛処置」であると言えます。

子ども達は大人に比べると些細な出来事で行き詰まりやすく、幼少期から思春期において日々の生活環境である家庭や学校の中で行き詰まる、「人生が終わった」と感じてしまう傾向にあります。そのような時に「根性で乗り越える」といった言葉は、既

に自分の手に負えないつらい気持ちに孤軍奮闘している子ども達にとっては胸に突き刺さるものかもしれません。必要とされるのは、「大人に助けを求めなさい。頼れる大人に相談しなさい」と、悩みの軽減に繋がる道を促すことです。子ども達が自らを傷つけたことに關してどのように対処すべきか。子ども達の多くは自傷行為に対する親の過剰な反応を恐れているため、叱責や、親が自責することは彼らよりいつそう内に籠らせてしまう可能性があります。しかし、常習化による自殺のリスクを軽減するためにも傷という目視できる問題に捉われないこと、彼らが自傷行為に至る背景を知ることの大切さを忘れてはなりません。

そして、自傷行為と言うのは自分の体を傷つけるだけでなく、傷つけた後の手当ても施さないことです。そのためにも、自傷を行う子ども達に關わる際には外科医のような関わり方が望ましいと言えます。傷の程度を冷静に観察し、必要な処置を行い、なぜそのような傷を作るに至ったのか思いを馳せる。「Respond medically, not emotionally.」(感情的ではなく、医学的に關わること)特に医療関係者は、子ども達がつらいときに、彼らがSOSを発信する

シンポジウム

「子ども達が健やかに地域生活を送るために」

福島県内で子どもや若者の療育支援に携わる方々にご協力頂き、子ども達が地域の中で生活していく上で彼らを取り巻く昨今の社会問題へのそれぞれの取り組みについてお話を伺いました。

みんなの力で子どもを守ろう



郡山市こども部こども支援課 とも家庭相談センター主任・保育士 佐藤 寿美氏

郡山市こども家庭相談センターでは、児童虐待やDV(家庭内暴力)などの相談を受け付け、関連する機関や学校と連携して問題の解決に当たります。最近の傾向として、親の養育力の低下や経済的な困窮やネグレクトに起因する教育環境の悪化が見られます。虐待やネグレクトが子ども達に与える影響として、基本的な生活姿勢が身に付かないことや自己肯定感の低下が考えられるとお話頂きました。



一般社団法人郡山医師会 郡山市医療介護病院 看護部長 宗形 初枝氏

30年に亘り助産師として思春期教育に携わってきた中で、今から10年程前、本県は全国的に見て人工妊娠中絶の件数が多く、当時助産師としてその問題を肌で感じたため、思春期に差しかかる子ども達が自らの体と心の変化で抱える悩みに寄り添えるようにと学校現場での思春期教育に当たられました。思春期教育を通して、自己肯定感の向上に繋げ、生を尊ぶ「優しさ」を伝える技術を広げていきたいとお話頂きました。



協働プロジェクト NPO法人しんせい 鈴木 綾氏

若者の声を届けたい

不登校、引きこもりなどの子ども達が社会参画する機会を設け、社会的排除の課題解決に取り組まれています。アウトリーチの際には支援の対象者の主訴を大切に、彼らを取り巻く環境の改善に繋がられるよう努めています。また、全国的に夏休み明けの9月1日は子ども達の自殺件数が多いことから子どもの自殺防止を呼び掛けるキャンペーンを実施し、休むことの肯定や大人への啓発活動を行っていらっしゃいます。



あさかホスピタル 児童専門医 子どもの心診療部長 本間 博彰

東日本大震災における子どもの心のケア活動の経験から

東日本大震災を経験して、危機に瀕しても立ち直りの早い子どもがいると言います。それに対し不登校や暴力行為などの問題行動が悪化する子どももいて、彼らの中には親が崩れてしまう姿を見て、強いはずの大人が失望している様子に傷心したのかもしれないと言います。大人は子どもの言い分を確かめず自らの考えを押し付けすることがあります。しかし、どんな場合でも大人は子どものモデルであるため、子どもの言葉に耳を傾けなくてはならない、とお話されました。



あさかホスピタル 理事長・院長 佐久間 啓

力が弱いことを理解し、「困った時に医師や病院が役立つことがあるかもしれない」と伝え、継続的な援助関係を築くことが重要です。自傷行為を行う若者は、生き方全体が自傷的であるとも言えます。飲酒や喫煙、摂食障害や過剰服薬など。彼らの自棄的な生き方は、安心して人に依存できないことを示唆しています。また、自傷を行う子ども達は友人にのみ告白することがあります。そのため、友人は自傷を行う子どもにとって一番身近なゲートキーパーとも言えます。しかし、打ち明けられた悩みの重責から自傷が伝染する可能性もあります。だからこそ、彼らの悩みが信頼出来る大人へ適切に繋がる必要性があります。松本先生は悩みや不安を抱える子ども達に「家族以外の3人の大人に相談してみてください」と話します。その言葉には、子ども達の周りに誰かしら必ず頼れる人がいるというのを知ってほしいという願いが込められています。子どもに対する真摯な姿勢を学ばせて頂きたいへん貴重な講演会でした。



一般社団法人 福島県精神保健福祉協会 会長 矢部 博興先生

一般社団法人福島県精神保健福祉協会では、地域住民の心の健康を向上させ、精神の病気で悩んでいる方の回復、社会参加を促し、地域の福祉に貢献することを目的として活動しています。毎年、様々なテーマで精神保健福祉についてフォーラムを開催しております。



一般社団法人福島県精神保健福祉協会では、地域住民の心の健康を向上させ、精神の病気で悩んでいる方の回復、社会参加を促し、地域の福祉に貢献することを目的として活動しています。毎年、様々なテーマで精神保健福祉についてフォーラムを開催しております。



グスタフ・ストランドル氏プロフィール

1974年スウェーデン生まれ。ストックホルム大学卒。高齢者福祉をテーマに、スウェーデンと日本で調査・研究。両国の懸け橋として多角的に活躍しており、その様子は日経ビジネス「老人ホーム革命」、朝日新聞「人脈記」、朝日新聞「be」、フロントランナー、NHK教育テレビ「高校講座」、フジテレビ「新報道2001」、TBS「夢の扉」など、多数のメディアに取り上げられている。講演実績はスウェーデン、日本、中国、韓国、オーストラリア、アメリカなど300回を超える。受講者は40,000名を超える。著書に「私たちの認知症 自分らしく生きるための「ケア・ツリー」とは?」(幻冬舎/2009年)、「スウェーデンのブネ・メソッド」(メディア・ケアプラス/2016年)がある。株式会社舞浜倶楽部代表取締役社長、浦安市介護事業者協議会会長、一般社団法人老人病研究会理事、富山大学非常勤講師、日本スウェーデン協会理事、元スウェーデン福祉研究所所長。



最後の意見交換会の場面では、スウェーデンは、認知症の方も含め「人」としてどう生きてどう死ぬかを自然に突き詰めていった結果、延命治療が行われていなく、日本ではその部分の議論が足りていないといったお話が出るなど、認知症の方も含めた一人ひとりが自分らしく生きていくためには、どのような社会を目指すべきかを深く考えさせられる、大変貴重な講演会となりました。



2016.11.22
あさかホスピタル 特別講演会

認知症と 共に生きる



第2部

シンポジウム
認知症と
共に生きる
地域とは

第2部は、認知症ケアの現状、医療・福祉関係者が果たすべき役割について、認知症の方の支援に携わる専門職の方や当事者のご家族から、それぞれの取り組みを中心にお話しいただき、認知症の方が暮らしやすく安心して地域の中で暮らすためには、ご家族・専門職・地域の協力が不可欠であり、それを実現するための多様な支援体制と、ケアの質の充実が図られていく必要性について意見を交わしました。

支え合い 共に生きる社会へ



公益社団法人認知症の人と家族の会
福島県支部郡山地区会 副代表
芦野 正憲氏

母親がアルツハイマー型認知症だったが、家族の会の交流により、身近な情報を得ながらより良い対応の仕方を知ることができました。治る病気でなく、介護する側も不安を抱える中、支え合う仲間



当クリニックは認知症を専門とし、認知症の方がいた自然に声をかけられる社会を目指しています。そのため、家族・支援者・社会・当事者本人の意識が変わらなければなりません。当事者に生きがいを持って頂く認知症カフェ「みんなのカフェ」の運営や、企業や学生にも参加してもらう啓発活動「ふくふくオレンジフェスタ」を行っています。現在は、若年性認知症の方の就労を目指した取り組みを進めています。



医療法人 湖山荘 あすま通りクリニック
デイサービスセンターあすま 管理者
若松 秀樹氏

認知症の人の 社会参加を目指して

必要です。国も制度を充実させてはいるが、昨今の事故・事件からも、多くの方の理解や協力が不足しています。また、サポートシステムの情報が必要としている人に適切に行き届いていないと思われれます。

平成 28 年 11 月 22 日(火)、これからの認知症の方の生活とケアがどうあるべきかを考える「認知症と共に生きる」講演会が、257名の参加者のもと、郡山市中央公民館で開催されました。

第1部

私たちの
認知症

第1部では、認知症や高齢者福祉をテーマに、スウェーデンと日本で調査・研究を行っているグスタフ・ストランドル氏を講師に招き、スウェーデンを参考にした日本での「自分らしい生活」の具体案を紹介頂きました。



福祉先進国とされるスウェーデンですが、1960年代までは、地域社会から隔絶したところに老人ホームがあり「エッテステウーパ(=姥捨て)」と同じとも言える状況がありました。

郡山市医療介護病院の 認知症ケアの取り組み



一般社団法人郡山医師会
郡山市医療介護病院 看護副部長
中野目 あゆみ氏

当院は、寝たきりや認知症の方へ優しさを伝えるケアの技法として、感情を重視し人権を尊重するアプローチ「ユマニチュード」を実践しています。結果、患者様が穏やかになったり、患者様とケア従事者との間で、より良い関係が築けるようになりました。地域でのサポート体制が充実していく中、医療現場でも、将来、自分達が受けたくなるような看護・介護を行うために、如何に人材育成していくかが課題です。

多職種協働による 認知症支援の姿



あさかホスピタル
診療支援アドバイザー
渡邊 忠義

あさかホスピタルグループは、多職種・多機関で連携

況がありました。70年代になり、人格の尊厳や自己決定などの思想が実際の現場にも取り入れられて形になり、ユニット化された施設の中で、プライバシーを守り、日常生活を可能にし、個人個人にあわせたケアが行われるようになりました。そして90年代になり、認知症の方へ最も適切なのは緩和ケアであるとされ、認知症緩和ケアが取り入れられました。

現在、スウェーデンでは、人が中心となっているケアが行われています。重要なことはその人にとって意味のあるケアを行い、その人にとって意味のある日常生活を実現させることです。そのため的手法として、スウェーデンでは「ブネ・メソッド」という音楽ケアや、人と人の触れ合いのケアである「タクティールケア」、95%の自治体では「BRDレジストリ」を取り入れていることを紹介しました。また、自身の経営する舞浜倶楽部と浦安市が協働した認知症対策事業の紹介や、スウェーデンと比べると、日本は非常に限られた財源・資源の中で認知症対策を行おうとしているが、どの国も経験したことのない高齢化社会を迎えようとしており、様々な課題を乗り越えて認知症の方のケアをしていかなければならないこと等をお話頂きました。

心を大事にした 共に生きる社会へ



あさかホスピタル 理事長・院長
佐久間 啓

人は共に生きる社会を目指すことで助け合うことが出来ます。自分が高齢化し認知症になったら認知症と共に生き、ご家族もその患者様と共に生きていかなければなりません。その人の尊厳を守り、その人らしい人生を全うできるようにサポートできる社会であってほしいと願います。支援、助け合いの中心にあるのは人間の心です。心を大切に地域をつくることで明るい未来が拓けると信じ、これからも地域と共に考えていきたいと思



安積地域包括支援センターの地域における取組み



地域包括支援センターは、「高齢者が住み慣れた地域で尊厳ある生活を続けられるよう、心身の健康の保持及び生活の安定のために必要な相談・援助等を行うことにより、保健医療の向上及び福祉の増進を図り、包括的な支援を行う」とともに、郡山市が目指す地域包括ケアシステムの構築の中核的拠点として、地域における関係機関とのネットワークの構築を推進し、高齢者の様々なニーズに柔軟に対応できる介護保険をはじめとした高齢者保健福祉の「ワンストップサービス」の拠点となることを目的に市内各地区17カ所に設置されており、当センターは、主に安積地区を担当しております。社会福祉士、保健師（等）、主任介護支援専門員の3職種を配置し、それぞれの専門性を活かしたチームアプローチにより包括的な支援を行っております。

安積町は、人口約3万4,000人、65歳以上の人口は平成28年1月統計で8,000人（構成率23.6%）を超え、市内でも一番高齢者人口が多い地区です。今後、団塊の世代が後期高齢者となる2025年に向け、安積町においても29地区の自治会を中心とした地域住民、民生委員、警察や消防、行政、各施設・機関、老人会等の各団体が「地域包括ケアシステム」の構築に向け、つながり、手をつなぎ、地域課題に取り組んでいくため、「安積町地域の支え合いを考える連絡会」を発足し、定期的に地域ケア会議を開催しています。

そうした状況を踏まえ、当センターでは、高齢者の総合的な相談や支援、介護予防マネジメント、虐待対応等の個別支援や地域住民の介護予防に向けた教室の開催、地域の通いの場への支援、認知症サポーター養成講座の実施、地域ケア会議の開催や地域住民の支え合い（支え）の構築につながることから、スタッフは地域づくりの視点をもつことを指針に業務にあたり、地域の方1人1人の声を大事にしていきたいと考えております。

今、地域のつながりが希薄になってきていると言われておりますが、昨年度、今年度と地域住民を対象に開催した講演会のアンケートでは、「安積町に住んでいてよかったです」と言える地域にしていきたい、「地域の支え合いに自分も協力していきたい」と言った声が多くありました。そうした地域の方々の思いを形にしていけるよう地域包括ケアシステムの構築の中核的担い手として今後も活動していきたいと思っております。また高齢者だけではなく、子どもも障害をもつ人たちもすべての人が共に住み慣れた地域で自分の役割をもち、いきいきと暮らしていける社会の実現に向けて、地域の方々と一緒に取り組んでいきたいと思っております。

ケアマネカフェ



個々のケースへの包括的かつ継続的な支援を行う上でも居宅介護支援事業所のケアマネジャーとの強固な連携が必要であり、地域包括支援センターにはケアマネジャーの支援を行うという役割があります。ケアマネジャーにとつて相談しやすい包括支援センターとなることを目指し、昨年3月より、担当エリアを中心とした居宅介護支援事業所を対象に「ケアマネカフェ」を開催しております。毎月テーマを設定し、日頃の業務での悩みや喜びなど互いに話し合い、顔の見える関係づくりを行っています。

「住民主体の支え合い」の推進



地域包括ケアシステムの構築には、「自助・互助・共助・公助」による支え合いが大切であると言われております。「互助」と言われる「住民主体の支え合い」を推進するため、地域の様々なところで住民に対し、寸劇を通してながら、地域の支え合いの大切さ、自分のできることを活かし、役割をもつことの大切さ、誰もが集える通いの場の意義などを分かりやすく発信しています。そうした取り組みを通じ、地域住民の意識の醸成を図り、住民が主体となってまちづくりを推進できるよう努めています。

いきいき元気あさかまち専門職ネットワーク



リハビリテーションスタッフや様々な専門職が地域の通いの場や地域ケア会議等に関与することで、地域住民の介護予防の意識向上や地域における介護予防の取組みの機能強化を図ることを目的に昨年、「いきいき元気あさかまち専門職ネットワーク」を形成しました。現在は、あさかホスピタルグループの専門職を中心に構成されており、グループの専門職の力を地域に活かすべく、地域活動の様々な場面で住民が活用できる「楽々あさか」の体操（ページ下部参照）を開発しました。今後は、安積町の各事業所の専門職の方々にも参画頂き、地域住民の活動をバックアップできる体制を構築していきたいと思っております。

認知症サポーター養成講座



全国的にも認知症サポーター養成講座が中心となり、認知症サポーターの養成を推進しております。郡山市においても現在、認知症サポーターが約21,000人養成されました。当センターにも3人のキャラバンメイトがおり、町内会や商工会、企業などからの要請を受け、認知症サポーター養成講座を実施してきました。実施後のアンケートから「やさしく声をかけたい」「相手のことを思いやり、温かい目で見守りたい」「地域での見守りが大切」といった声が上がっています。

安積町地域の支え合いを考える連絡会



安積町の地域包括ケアシステムの構築を目指し、地域ケア会議の圏域会議にあたる連絡会を昨年度発足し、定期的に開催しております。主な構成メンバーは、各自治会長、老人会、民生委員、地区社会福祉協議会、介護保健施設、居宅介護支援事業所、医療機関、消防、警察、行政等です。これまで、お互いの役割を再認識すること、地域の現状を把握することを目的に、それぞれの立場から取組み内容や課題などについて話し合いました。また「わたしの住んでいる町の再発見シート」を作り、自分の地区の強みや自慢できる取組み、課題やこんな町にしたいといった項目での聞き取りを行い、それぞれの地区の特徴や課題を把握することができました。次年度以降は、それらを活かしそれぞれの地区での話し合いを進め、地域の支え合いを推進していく予定です。

手を逆に
変えて
繰り返す

右手を上
左手を腰にあてて
体を傾ける

肩と
わき腹を
伸ばす運動
2セット

組んだ手を
頭の後ろの方へ
肘を開いて胸を
そらす

両腕を
ゆっくり頭の
上に上げます

指を組み
前方に
伸ばします

肩と胸の
のびのび
ストレッチ
2セット

楽々
あさかの体操

SON・福島NPO法人設立について

知的障がいのあるアスリートが主役の「スペシャルオリンピックス」を知っていますか。スペシャルオリンピックス(以下SO)とは、知的障がいのある人たちに様々なスポーツトレーニングとその成果の発表の場である競技会を、年間を通じ提供している国際的なスポーツ組織であり、世界170ヶ国以上で450万人のアスリートが参加しています。日本でもSO日本を中心に47都道府県すべての地区組織でSOの活動を展開しています。

SON・福島は2010年に設立し2012年SO日本冬季ナショナルゲーム福島大会の実施と6年間の活動を経て、2016年11月22日NPO法人への認証を頂くことができました。近年では、夏季競技8種、冬季競技4種の12競技を実施しており参加アスリートは90名を超え、多くの賛助企業会員、コーチ・ボランティア・ファミリーのご支援と寄付により活動を継続しています。

今後も、スペシャルオリンピックスの活動を県内全域に展開しスポーツを通じて人と人が支えあう共生社会の実現とアスリートが輝く機会の提供に努めたいと思います。



平成28年度
クリスマスコンサート
Christmas concert

平成28年12月21日にあさかホスピタル主催のクリスマスコンサートを開催いたしました。ポニー保育園の子どもたちによる可愛い劇とダンスや、郡山市出身で、ソプラノ歌手の小針侑子様による心に響く美しい歌のステージが催され、ご来場頂いた入院、外来の患者様をはじめ、ご家族や地域住民の方々、約150名と一緒に素敵なクリスマスのひとときを過ごすことができました。小針様と子どもたちによる歌の共演や、会場全体での合唱もあり、ご来場頂いた方々の表情がとてもにこやかに、非常に温かい雰囲気に包まれる幸せな時間となりました。



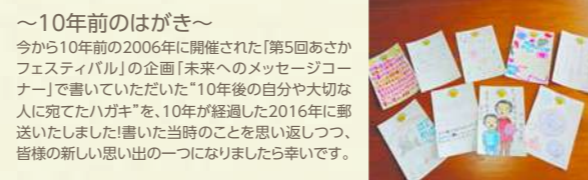
東北の秋とは思えないほどの眩しい晴天に恵まれ、第14回あさかフェスティバルが開催されました。今回のテーマは「共に生きる」。シンプルでありながら、とても深いメッセージ性を持つ言葉であると思います。

あさかホスピタルグループでは「共生事業」を推進しています。共生事業とは、障害のある方もない方も、地域の子どもも、大人も、多世代の方々すべての人が集い、交流を深め、共生するものすべてが繋がりと幸せを感じることでできる事業です。このように、あさかフェスティバルがこれからも地域の方々をはじめとする様々な方々が集い、交流できるイベントとなることを願い、今回のテーマを決定いたしました。

日本大学東北高等学校吹奏楽部のはじめ

このような元気一杯の演奏、福島ファイヤーボウのチアリーディングショー、菊池章夫さんのコンサート、日本大学工学部ジャグリングサークルによる手品ショーなど、今年も多様なステージイベントで会場は大盛況でした。特別企画として写真家・鈴木心様にご協力頂き、「鈴木心写真館」を設け、たくさんの方々にプロによる素敵なお写真を楽しんで頂くことが出来ました。食ブースも例年より早く完売になり、ご来場の皆様にお楽しみ頂けたことと思います。

これからもあさかフェスティバルを通して、地域をはじめとする様々な方々と私たちあさかホスピタルグループのスタッフが繋がっていきけるよう、来年もいつそう盛り上がるフェスティバルを企画したいと思います。



～10年前のはがき～
今から10年前の2006年に開催された「第5回あさかフェスティバル」の企画「未来へのメッセージコーナー」で書いていただいた「10年後の自分や大切な人に宛てたハガキ」を、10年が経過した2016年に郵送いたしました！書いた当時のことを思い返しつつ、皆様の新しい思い出の一つになりましたら幸いです。

- 運営協力員** ☺☹☹
- ◎ボランティア
活動提供、運営協力
→安積地区ボランティア連絡会
ピアサポーター、地域住民
 - ◎地域包括支援センター
→協働、後方後援
(看護師、社会福祉士)
 - ◎有限会社
アサカサービスセンター
→場面提供、カフェスタッフ
- あさかホスピタルグループの運営要員** ☹☹☹
- ◎医療法人
看護師2名・精神保健福祉士2名
事務スタッフ
 - ◎福祉法人
介護支援専門員3名
認知症キャラバンメイト・
認知症介護指導者
 - ◎NPO法人
事務スタッフ→法人間の連携を目的に



退院支援統括コーディネーター
マネージャー 堀内 美智子

現在までの参加者として、ご家族は6名、地域住民は3名、専門職は4名で、毎回の平均合計参加人数は13名です。今後もPR活動を重ねて少しずつでも地域の方が気軽に立ち寄れる憩いの場になれるようにしていきたいと考えています。



白沢地域包括支援センターがコーディネーターとなり、カフェの趣旨に賛同された白沢地域にお住まいの有志の方々によって運営されており、名前の由来ですが、Kふあーむの場所が昔から地域の方々に慣れ親しまれた里山であることから「さとやま」と名付けられました。住民主体による手作りの温かいカフェとなっております。どなたでもご利用頂けますので、ぜひ一度足をお運びください。



Cover Photo
渡邊 義紘 WATANABE Yoshihiro 1989年熊本県生まれ
主な展覧会に「Attitude2002」(熊本市現代美術館、熊本、2002)、「Life Map-テトテテノアイダ」(ギャラリーアートリエ、福岡、2010)、「渡邊義紘×美濃部貴夫 二人展」(A/A gallery、東京、2011)など。
渡邊は1本のハサミを用いて、紙を切り様々な生き物を生み出す。彼の目には、ハサミを入れる道筋が映っているかのように、肌や毛並みまでも細かく繊細に再現されている。そして、その目は秋頃の限定された時期の落ち葉をつかった「折り葉」の作品たちでも発揮されている。大小様々な落ち葉は、渡邊がそれぞれの葉に寄り添い、彼の手のなかで一つの作品となって現れる。そして、何気ない葉っぱですら作品になるという驚きと発見を教えてくれる。

Circolo
チルコロ
こおりやまオレンジカフェ
「チルコロ」について

認知症になっても、住み慣れた地域で、安心して尊厳のあるその人らしい生活を継続できる様にする。ともに、ご家族の介護負担軽減を図り、認知症の方およびそのご家族を支える地域づくりを推進する事を目的に平成28年4月から検討を重ね、7月に「こおりやまオレンジカフェ」を開所しました。

活動内容は、第一部はフリートークングをしてカフェで一息、第二部は体験活動をしてコミュニケーションが図れるようになっていきます。体験活動ではNPO法人アイ・キャンのピアサポーターの方に協力頂く活動もあります。参加された方は情報の共有と「話す事で少し楽になった」と笑顔が見られます。

2016.10.3
認知症カフェ
「さとやま」がオープンしました。

本宮市内で3カ所目となる認知症カフェ「カフェさとやま」がオープンいたしました。毎月一回トレンディピアノを会場に、認知症や介護予防等について語らう場として白沢地域の方々を中心にご利用頂いております。